文 献 紹 介

藤岡謙二郎編：『歴史のふるい都市群Ⅰ』

大明堂　1984年5月

B6版　185ページ　1890円

山田安彦・山崎謹哉編：『歴史のふるい都市群2～12』

大明堂　1989年12月～1997年11月

B6版　192～330ページ　2447円～3150円

日本の歴史都市の都市誌として類を見ない，また全国の都市（市）のほぼ40％に相当する251カ所（その他に町は25カ所）の都市を取り上げて詳述した叢書『歴史のふるい都市群』全12巻が完結した。第1巻が1984年に刊行された後，5年間の空白があったとはいえ，13年後の1997年にいたって，ようやく全巻の完成をみたのである。

本叢書は，編者の藤岡謙二郎氏が第1巻を刊行した1984年の秋，続く東北編が進捗しないとの理由で，立命館大学での教え子であった山田安彦氏に後続書の編集を全面的に依頼し，翌年の春には急逝するという運命的な経緯の中で，編集が継承されて今日の完結をみた。編者の山田安彦・山崎謹哉両氏は，新生の初巻に当たる第3巻のはしがきにおいて，叢書の完成を藤岡先生の遺言と受け止め，地域に根差した大学教員，高校教員などの研究者に執筆を御願いし，都市の歴史を見直すことによって今後の新しい地域づくりの糧となるような意義のある叢書にしたいとの抱負を述べている。歴史や文化を活かした地域振興が叫ばれている今日，まことに当を得た指摘であった。そして，主な都市の歴史地誌をまとめるだけではなく，都市内を歩き，都市景観を観察する地域住民や外来者が増えることを願って，新たにミニツアーのコーナーを設けたところにも，本叢書のユニークさがうかがえる。以下に，各巻の構成と選定された都市およびミニツアー都市を掲げる。（　）内はミニツアー都市である。

第1巻：関東とその周辺の都市－鎌倉，東京，横浜，府中，石岡，川越，銚子，関宿，境，水戸，前橋

第2巻：関東の都市－日立，那珂湊，宇都宮，高崎，熊谷，秩父，佐原，成田，千葉，八王子，小田原（日光，足利，栃木，小山，沼田，桐生，館林，久留里，館山，府中，三浦）

第3巻：東北地方太平洋側の都市－相馬，いわき，白河，郡山，福島，会津若松，仙台，多賀城，一関，平泉，盛岡，釜石（相馬，平，福島，郡山，会津若松，仙台，多賀城，一関，平泉，盛岡，釜石）

第4巻：東北地方日本海側・北海道の都市－弘前，能代，秋田，角館，鶴岡，山形，米沢，小樽，札幌（五所川原，男鹿，長井，函館，松前）

第5巻：北陸と信州の都市－長野，松代，上田，村上，新潟，富山，高岡，金沢，福井，敦賀，小浜（松本，岡谷，馬籠，妻籠，上越，糸魚川，青海，輪島，七尾，小松，武生，鯖江）

第6巻：東海と周辺の都市－甲府，三島，静岡，浜松，岡崎，知立，名古屋，瀬戸，大垣，高山（富士吉田，都留，身延，下田，伊東，修善寺，磐田，掛川，豊橋，豊川，犬山，小牧，常滑，知多，中津川・苗木，美濃，関，美濃加茂）

第7巻：近畿地方の都市－舞鶴，綾部，亀岡，京都，長岡京，宇治，奈良，大和郡山，天理，桜井，池田，枚方，大阪，堺（木津，橿原，大和五條，高槻，枚岡）

第8巻：五畿内周辺の都市－彦根，草津，守山，大津，桑名，亀山，伊賀上野，津，和歌山，田辺，新宮，三田，篠山，神戸，西宮，尼崎，姫路（長浜，水口，松阪，伊勢，尾鷲，熊野，橋本，豊岡，出石，龍野，赤穂，洲本）

第9巻：瀬戸内の都市－岡山，総社，広島，福山，尾道，下関，山口，防府，長府，岩国，高松，丸亀，今治，松山（倉敷，岡山東部，三原，美祢，小野田，坂出，多度津，琴平，善通寺，新居浜，西条，小松）

第10巻：山陰・中国山地・南四国の都市－鳥取，松江，大田，萩，津山，三次，津和野，徳島，高知，安芸，室戸，宇和島，吉田（倉吉，出雲，大社，長門，新見，勝山，高梁，加計，益田，鳴門，小松島，須崎，中村，土佐清水，宿毛，八幡浜）

第11巻：北九州地方の都市－北九州，福岡，太宰府，久留米，宇佐，豊後高田，大分，別府，杵築，唐津，佐賀，平戸，松浦，大村，長崎，島原（宗像，大野城，筑紫野，柳川，中津，日田，臼杵，佐伯，竹田，伊万里，有田，鹿島，佐世保，諫早，五島，厳原）

第12巻：南九州地方の都市－熊本，宇土，八代，

玉名，延岡，日向，宮崎，都城，鹿児島，国分，鹿屋，隼人，那覇（山鹿，本渡，西都，日南，串木野，西之表，石垣）

ここで取り上げられた都市には，行政的には町レベルのものも若干入っているが，いずれも近世城下町を中心として港町，宿場町，門前町などに起源をもつバラエティに富んだ歴史都市が数多く，各巻でその成立と発展について詳しく述べられている。本文の記述は，概ね都市の現状を概観した後に，古代，中世から近世，近代にいたる歴史をたどる形式をとっており，260名に及ぶ執筆陣が，それぞれに力量を発揮してまとめている。特に，城下町の絵図や町割りの地図が掲載されていたり，市街地の拡大など都市の地域変化を知ることができる地図があると，興味が湧くし理解も深まる。

第2巻以降，新たに設定されたミニツアーに関していえば，まず第3巻のみが本文で取り上げた都市についてのツアーガイドにページを割いているが，それ以外の巻では本文の都市と重複しないように，別の都市を紹介するためのミニツアーページとなっている。この間の編集上の変更については何も述べられてはいないが，数多くの都市を取り上げるには，このほうが適しているからかもしれない。しかし，歴史地理的に意義のある町並みを歩いてもらい，地域認識を深めてもらうためのミニツアーガイドであるならば，歴史の古い都市群として重要な都市を精選し，その都市のより正確で詳しいルートマップに即したきめ細かいガイドがあったほうが，読者にとって利用価値が高いのではなかろうか。特に，歴史資源を活かした観光都市としての機能を強めている都市については，一層その感を強くする。実際ミニツアーのページで，このような視点から地形図にポイントを記したルートを掲載し，ルートに沿った案内をしている都市もあるのであるから，統一した形式でのミニツアーコーナーとした方がよかったのかもしれない。なお，スケールの入っていない地図が散見されるので，再販の際には訂正を御願いしたい。

いずれにしても，十有余年にわたって総ページ数2980ページもの叢書を編集された山田安彦・山崎謹哉両氏のご尽力は大変なものであったろうと推測される。本叢書が歴史地理学の発展のみならず，今後の歴史都市の地域振興を図る際にも，大きな役割を果たすであろうことは疑いをいれない。広く一般の読者にも紹介されることを望みたい。

（山村順次）

有薗正一郎著：『在来農耕の地域研究』

古今書院　1997年10月

A5判　205ページ　5,500円（本体）

日本農業の将来を展望するために，有効な過去のデータを収集・保存することを目標とする著者が，『近世農書の地理学的研究』（1986年，古今書院）につづいて，本書を上梓された。書名に用いられている「在来農耕」とは，「全国どこでも通用する性格とその枠の中で地域固有の性格とを併せ持って，20世紀中頃までおこなわれていた農耕のこと」である。

読みすすむにしたがって，在来農耕を担ってきた農民たちの創意工夫に富んだ農耕技術が，鮮やかによみがえってくる。1985年以降に発表された15編の論文が集成された本書ではあるが，適切な加筆・削除によって重複の部分がほとんどない。それに加えて，耕作技術や農具に関する写真や模式図も豊富に挿入されているので，たいへん読みやすい。

9章からなる本書の総論的役割をもつ部分として，「はしがき」につづき，第1章「在来農耕技術研究の視点」と，第2章「近世以降の在来農耕技術の地域性」が設けられている。第1章では，水稲耕作暦と人力犂の分析を事例として，近世以降における各地域の在来農耕技術は地域性を有するとともに，「小規模経営農家による土地および労働集約的な技術」の存続としてまとめられる普遍性をも併せもっていることが指摘されている。それゆえに，在来農耕技術を研究する際は，対象地域を構成する諸要素の中から固有の特徴を地域性として説明・累積し，それとともに，各地域共通の部分も明らかにすることによって，各地域の在来農耕の全体像がみえてくるとする，著者の研究視点が明示されている。

第2章では，近世に農書類が著された11地域をとりあげ，農耕技術の地域性が実証されている。ここでは現代までの農耕技術の変化についても述べられており，早場米の導入によって金沢平野が水田単作地域になったように，20世紀における耕地利用率の低下なども明らかにされている。

つぎの第3～7章は，在来農耕に関する実証的事例研究の部分にあたる。